

「もう一つの会議室」になるスナックが繁盛する。

文 中谷彰宏

text & illustration by Akihiro Nakatani

各

の商工会議所で講演に呼んでいただくのと、どこの会場にも、必ず1人、垢抜けたお姐さんがいます。

参加した経営者の方々が、そのお姐さんに挨拶をされています。講演後、僕もご挨拶に伺うと、彼女は、その街のスナックのママさんであることが多いです。僕は実家がスナックだったので、会話の中に同じ空気を感じます。

我が家のスナックは、地域の会議室でした。会社内では、腹を割って話せない内容も、スナックでは語り合えます。他会社間の話では、どちらの会社の会議室でも話しづらいため、社外のスナックという「もう一つの会議室」になります。

社内の会議室では、タテマエの議論になります。「もう一つの会議室」では、ホンネの議論になります。「さつきは、



ああ言っているけれど、ホンネのところではどうなの」という話をする

ことができます。

酔って本音が出るわけではありません。実際には、スナックに来るお客さんは、酔うほどお酒を飲むわけではありません。大事な話ができる冷静さを保っています。

「お酒が入る」というのは、「酔う」ことが目的ではありません。「酔った振りでホンネを話せる」という口実なのです。

スナックに街の情報が集まる。

地方の街には、出張の営業マンも来ます。その土地の人脈を作ることができるのがスナックです。ママさんが、信頼できる人を紹介してくれます。スナックは「もう一つの異業種交流会」なのです。

その街の情報を得るには、スナックに行くのが得策です。ジャーナリストがターゲットの会社へ取材に行っても、社員は、社内で箝口令かんこうれいが出されている話ではできません。スナックでは「独り言」として聞くこともできます。

普段は会うことができないライブ



中谷彰宏
公式 Instagram



Profile

1959年、大阪府生まれ。早稲田大学文学部演劇科卒業。博報堂勤務を経て独立。1991年に株式会社中谷彰宏事務所を設立。私塾「中谷塾」を主催。全国で講演、ワークショップ、オンライン講座を行う。著作は1100冊を超える。
公式サイト <https://an-web.web.com/>